

四川大地震

余震の度、精神状態悪化

AMDA 医師ら帰国、会見

国際医療NGO「AMDA(アマダ)」(本部・岡山市)は、中国・四川省の大地震被災地に派遣していたニティアン・ビーラバーク調整員と、岡山大大学院助教の汪達紘医師の2人が帰国したことから25日、記者会見し、現地での医療活動を報告した。2人は現地の様子を写真、映像で紹介。途中、被災者の精神的なケアの必要性から、帰国予定を約2週間延ばして、カウンセリングなどを行ったという。

アマダのチームは5月14日、6月20日に同省内に滞在。延べ約1200人を診療した。

ビーラバーク調整員は5月17日から、医療チームに同行し、人員、医薬品の確保などのため連絡、調整役として活動した。当初、地滑りなど、被害の激しい山岳地帯に入ったが「建物の多くが崩壊し、屋根があっ

ても壁が壊れているのがほとんどだった」と話した。

チームは、当局から避難指示を受け、同19日から成都市内の病院に移り、医療活動を行った。一気に両親、妻、子どもを失った男性もおり、精神的なサポートが必要と判断。後半からは心理カウンセリングも行った。

5月23～30日に成都市の

病院で診療した汪医師は「数え切れないほど余震があり、その度ごとに精神状態が悪化した人も多かった」と振り返った。アマダとして、535件の心理カウンセリングを行った。

地震発生当初、国外からも感染症の発生、拡大が心配されたが、汪医師は「成都市で担当した病院に入院している被災者には、感染

が感染症を抑えているとの印象を語った。

アマダは今後、同省の医療機関などと連携し、要請

症にかかっている人はいなかった」と報告。各地を回ったビーラバーク調整員は「軍の医療関係者が至る所に消毒スプレーをまいていた」と話し、こうした活動

に応じてメンバーを派遣、医療活動を行うという。